

物語の盛り上がりについて話し合おう
 「物語の盛り上がりを考えながら読もう - 夏のわすれもの - 」(4年)

主張点

1 本単元で育成する国語力をこうとらえる
 『物語の盛り上がり』を視点として読むことにより、表現に着目し読む力、展開に沿って主人公まさるの行動や気持ちの変化を読み取る力、その考えを友達と交流する力を養うことができる。また、『物語の盛り上がり』を通して、4年生段階としての『主題』へのアプローチを試みたい。

2 学習指導・評価のポイント
 子どもたちが、より文章に即して主人公の気持ちを考えられるよう、視点として『物語の盛り上がり』を設定して読む活動を行う。
 自分の考えの根拠となる言葉をもって話し合いに臨み、考えを伝え合うことができる力を養う。そのため、考えをもつ場、交流をする場を設定する。
 思考を深めたり、評価をしたりするために、学習の過程における自己の思考の変遷を表現物として残しておく。

- 1 本単元の目標
 大切だと思う文に注意しながら物語の出来事の流れを読み取り、物語の盛り上がりについて考える。
- 2 単元計画 (全8時間)

関心・意欲・態度	・ 物語に興味をもち、進んで読んだり、感想や意見を発表したりしようとする事ができる。
話す・聞く	・ 伝えたいことを選び、自分の考えが分かるように、筋道を立てて相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話すことができる。
書く	・ 書く必要のある事柄を収集したり選択したりすることができる。
読む	・ 場面の移り変わりや情景を、想像しながら読むことができる。 ・ 目的に応じて内容を大きくまとめたり、細かい点に注意したりしながら文章を読むことができる。 ・ 読み取った内容について自分の考えをまとめ、一人ひとりの感じ方には違いがあることに気付くことができる。 ・ いろいろな読み物に興味をもち、読むことができる。
言語事項	・ 繰り返されている言葉、大切な言葉に注意しながら読み進めることができる。

次	時	学 習 活 動	評 価	評価方法
1	1	全文を通読し、初発の感想を発表し合う。	・ 物語に興味をもち、進んで作品を読み、感想を発表しようとしている。 ・ 物語の場面設定について理解している。	行動観察 発言
	2	全文を7つの場面に分ける。 時、場所、登場人物に注目して表に整理する。	・ 7つの場面に分け、観点に注意しながら表に整理している。	ワークシート 発言

2	3	登場人物の関係をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ まさるとおじいちゃんの間係を表にまとめる。 ・ 叙述をもとに、人物の気持ちや場面の様子を読み取っている。 ・ 出来事の中で大切だと思う文を見つける。 	発言 ワークシート
	4	出来事の流れの中で「大切だと思う文」を抜き出す。		
	5	物語の最初の文、最後の文、抜き出した文を書き写す。 物語の盛り上がりを考えながら、物語を一本の線で表す。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 出来事の流れの中で大切だと思う文を見つけ図にまとめている。 	ワークシート
	6	物語が一番盛り上がっている一文について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分と友達の考えの共通点や相違点を意識しながら話し合っている。 ・ 物語の盛り上がりについての自分の考えをもち、物語が一番盛り上がっていると思う根拠を文中から探している。 	行動観察 発言 ワークシート
	7	まさるの気持ちがどのように変わったのかをとらえ、その後のまさるの様子を考える。 学習後の感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文中の言葉を使って、まさるの気持ちの変容を書くことができる。 ・ その後のまさるについて、自分の言葉で表現することができる。 	行動観察 発言 ワークシート
3	8	家族や友達について書かれた本を紹介し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族や友達について書かれた本に興味をもち、積極的に読もうとしている。 ・ 物語の盛り上がりを意識して読むことができる。 	行動観察

夏休みの読書活動へ...家族や友達をテーマとした本を読ませる。

3 指導の実際

(1) 場面設定確認

ここでは、この作品の背景となる物語の設定の確認を行った。『時』、『場』、そして『登場人物』を押さえる。その中で中心人物であるまさる（ぼく）と重要人物であるおじいちゃんがいることを押さえた。

語り手を意識するとは...

この物語では、語り手（話者）が「ぼく」であり、「ぼく」の目を通して物語が描かれている。物語の読みにおいて、語り手の視点を意識して読み進めることはたいへん有効であるが、子どもたちにとっては初めての経験であった。

この時点での語り手の押さえが十分にできていなかった。そのため、子どもたちがこの後の場面分けをする際、まさるの気持ちが押さえにくかったようであった。語り手を意識させる活動が必要である。

子どもたちは、重要人物がおじいちゃんであることは容易にとらえられた。初発の感想では、ほとんどの子どもが「涙が出そうになったよ。」と物語に引きつけられていたが、悲しいお話であるという感想がほとんどであった。まさるの気持ちの変化や心の成長について気付いている子どもはほとんどいなかった。

まさるの明るさ、子どもらしさに共感しつつ、おじいちゃんの死の悲しみもとらえている。しかし、まさるの変化については気付いていない。

○「夏のをすれもの」を読んだ感想を書きましょう。

時(いつ)のお話	夏休みの思い出
場(どこ)のお話	・おじいちゃんの家 ・おじいちゃんの家 ・おじいちゃんの家
登場人物	中心人物: 主人公 重要人物: 王女 (お話を始める人など)
重要人物: 王女 重要人物: 王女 重要人物: 王女	重要人物: 王女 重要人物: 王女 重要人物: 王女

(2) 場面分け

物語の構造を把握するため、まず場面分けを行った。その際の着目点は、『時』『場が変わるところ』『登場人物』とした。また、教師から7場面であると場面数を提示し、より活動を焦点化した。

7	6	5	4	3	2	1	時 場面の初めの文 (○○○場面)	時(いつ)	登場人物	場面の出来事をまとめよう (○○○場面)
7 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家	6 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家	5 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家	4 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家	3 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家	2 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家	1 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家 おじいちゃんの家				

めあて 時(いつ)や場(どこ)、登場人物が変わるところを見つけ、7つの場面に分けよう。

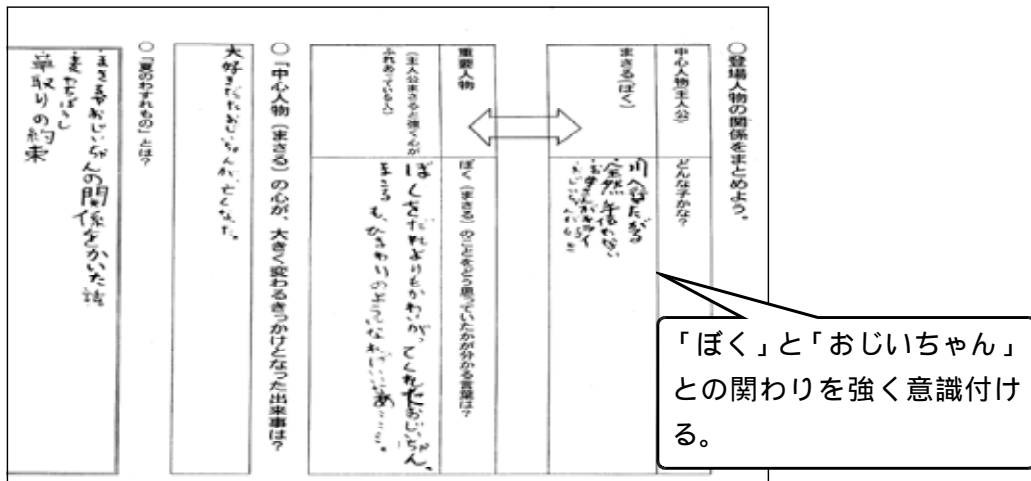
『時』『場』『登場人物』をしっかりと押さえることで、あらすじをまとめやすくすることができた。

次に、この表をもとに子どもたちに1つの場面を1文で表現させ、7文であらすじを完成させた。7文は、あらすじとしては長いかもしれないが、本学級の実態から考えると初期の段階として妥当であると考えている。

(3) 登場人物の関係をまとめながら、場面の中での「大切だと思う文」を抜き出し、一本の線に表す。

物語の構造を読み取るために、出来事の流れの中での「大切だと思う文」を抜き出していった。しかし、「出来事の流れの中で大切だと思う文」という表現が子どもにとって曖昧なので、どのような文を抜き出せばよいのかが分からない子どもが多かった。そこで、登場人物の関係を中心人物と重要人物に焦点を当て、ワークシートにまとめる活動を入れた。常に「ぼく」と「おじいちゃん」の関係に絡ませることにより活動の内容がはっきりと分かったようである。

また、この活動により、子どもたちはもう一度文章表現に着目し内容を読み取ることができていた。



物語の盛り上がりを意識した読み

子どもたちは、中心人物まさるの気持ちが大きく変わるきっかけとなった出来事を、「まさると大きく関わっていたおじいちゃんの死」とであるととらえていた。これは、物語の盛り上がりにも大きく関わる点である。子どもたちにこのことをはっきりと認識させたあと、大切だと思ふ文を「おじいちゃんとの関わりにおいて、大切だと思ふ文」ととらえさせた。

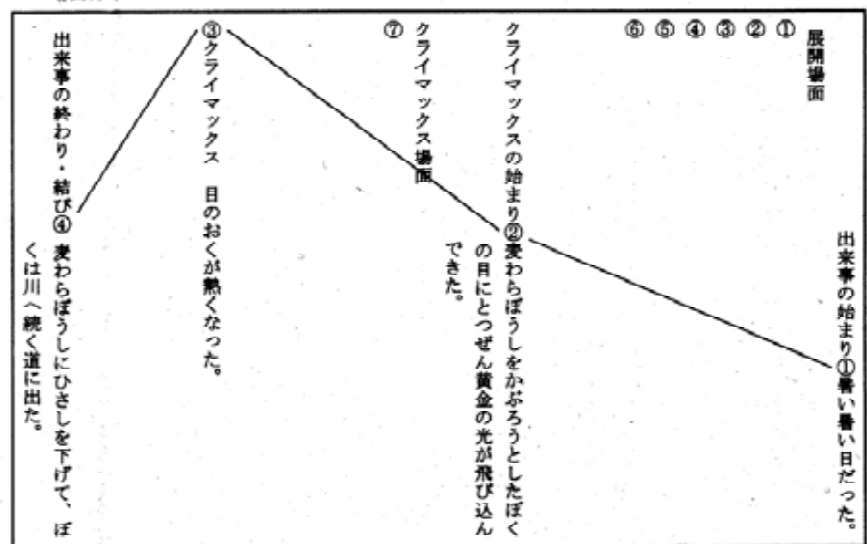
文を選ぶ観点がはっきりしたので、子どもたちの活動が活発になった。また、ここで語り手について投げかけることも文章表現に着目する際に有効であった。

そして、その大切な文の中にも、まさるとおじいちゃんの関係がより強く気持ちとして表れている文があることを押さえた。これまでの読みの中から、子どもたちは7場面が中心人物の気持ちが一番大きく変わっているところだととらえていた。

心情曲線との違いをとらえる ... 物語の流れを線で表すという前提を教えることの必要性

ここでは、物語の盛り上がりを「物語の出来事の流れを一本の線で表す」活動がある。これは、物語を客観的に見るための方法であるが、ともすれば心情曲線と混同してしまう場合がある。

そこで、まずここで子どもたちに、この物語の盛り上がりの線が、「おじいちゃんとの関わりの高まり、(おじいちゃんの

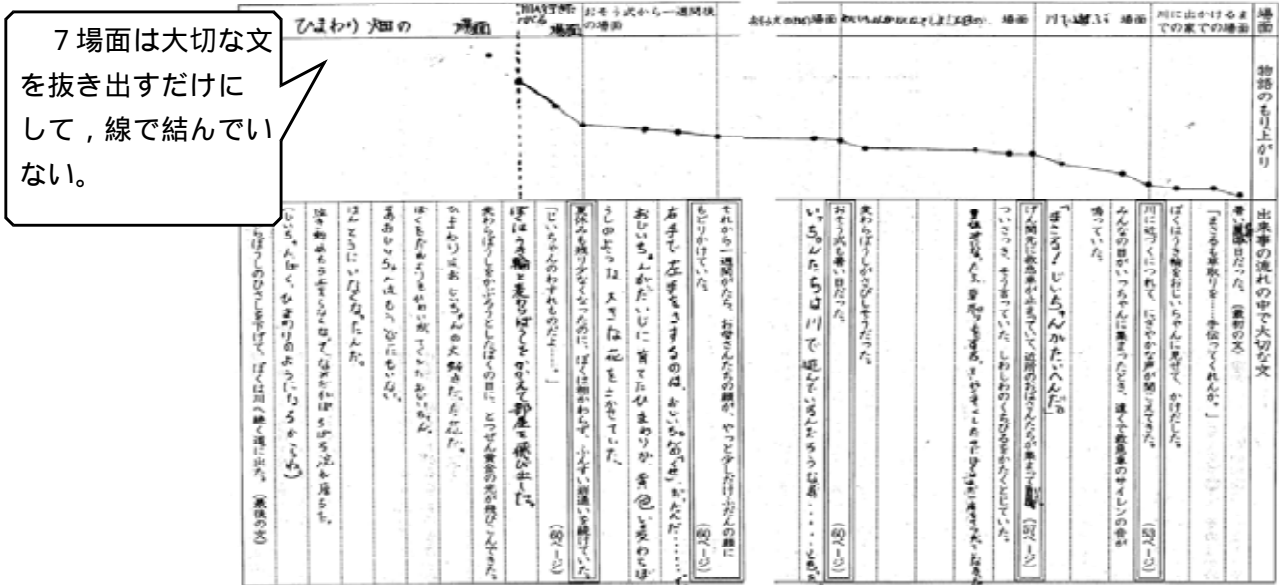


一本の線であらわすと...図の例示

死を認識したこと)」を表す線であること、中心人物の気持ちが一番大きく変わる場所を頂点にした山の形になることを押さえた。盛り上がりという考え方を、視覚化することができる。

そして国語の学習を利用し、6場面までの物語を一本の線に表していった。この段階では7場面のどの文が最も大切な文かが決められない子どもが多かったので、線は6

段落までにした。



(4) 物語が一番盛り上がっている一文について話し合う。

「物語が一番盛り上がっている」ところ（本実践では『クライマックス』と呼んでいる）を「中心人物の気持ちが大きく変わるところ」と教え、7場面からとらえさせた。その際、どうしてその文を選んだのか理由も記述させ根拠をもって文章に即した読みを促した。

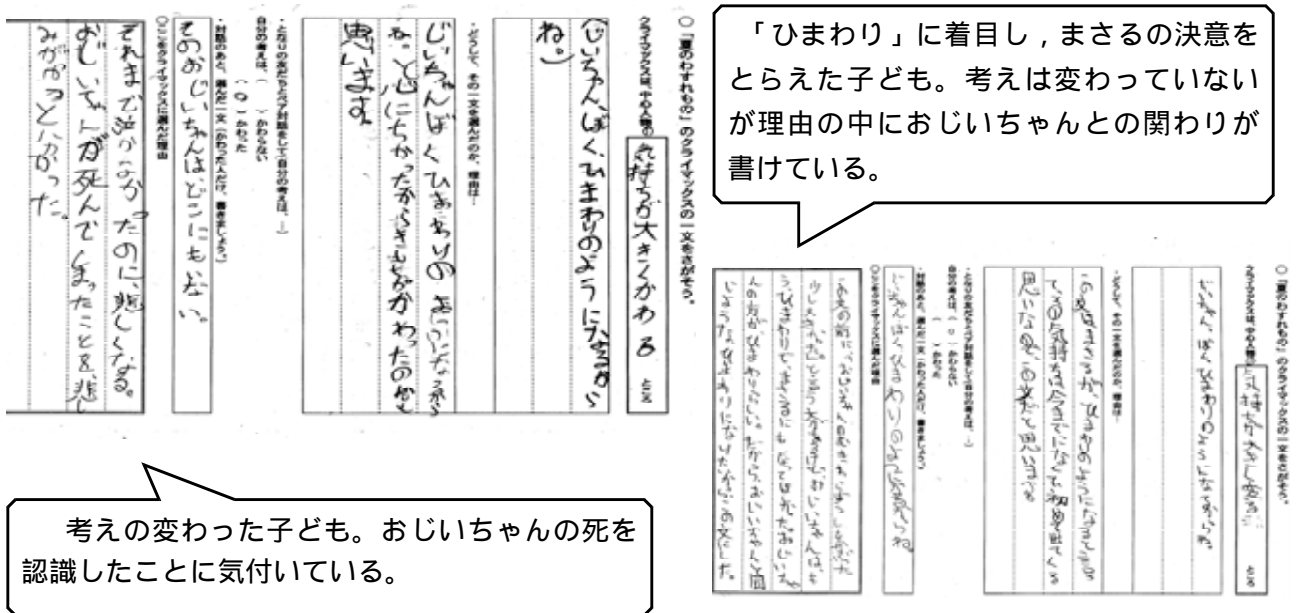
隣の友達とのペア対話の設定

自分の考えを声に出して確認したり、自分と違った考えに触れ、比較しながら考えをまとめる機会をすべての子どもに確保するため、ペア対話の時間を設定している。これにより全員が考えを相手に伝えることができるとともに、自分の考えがはっきりと固まっていない子どもも友達の意見を参考にまとめることができる。全体の発表の前にこの時間を持ち、お互いに説明をし合うことで、自分の考えをもつことができる。また「分かってほしい」という思いから言葉にこだわって本文を指し示しながら説明するなど、隣で説明するからこそできる説明の様子も見られた。

全体での話し合い

その後全体で話し合いを行った。子どもたちが選んだのは、まさるの決意「じいちゃん、ひまわりのようになるからね」のところが3分の2、おじいちゃんの死を実感したところ「そのおじいちゃんはもうどこにもいない」「ほんとうにいなくなったんだ」「目の奥が熱くなった」が3分の1であった。後者については、数文になっていたがその理由がおじいちゃんの死についてまさるの気持ちの変化についての内容であったので、あえて一文に絞らず、決意と対比した意見として扱った。

どちらも、おじいちゃんのことを考えているととらえ、同意見とした。



話し合いを続けるにつれ、子どもたちは友達の意見にふれ自分の考えが揺れてきた子どもいた。話し合いのあともう一度自分の考えを書かせた。

考えの変わった子ども、選んでいる一文は同じだが根拠の中に友達の意見を加えた子どもなど、話し合いにより子どもたちの考えの深まりが見られた。

ペア対話を行っていたことで、子どもたちは自分の考えがまとめられているうえ、自分の考えの検証をしたり、友達の考えを聞いてそれに賛成したり反対意見を述べたりしたいという意識が生まれ、考えを表現することに対する抵抗感がなくなっている様子が見られた。

授業後、友達に「今日はたくさん意見を言いすぎたな。」と笑顔で語る子どもや「先生、やっぱり私はこう思うのだけど…」と語りかけてくる子どもなど、その表情からも主体的な読みの姿を見ることができた。

(4) 作品の主題に迫るために

まさるの気持ちの「何が」「どう変わったのか」をはっきりととらえる。

盛り上がっている一文を、「まさるの気持ちが大きく変わったところ」と押さえていたがここでは「まさるのおじいちゃんに対する気持ちが大きく変わったところ」とした。初めの「盛り上がり一文」の考えでとらえると、まさる自身の変容である決意の文も考えられる。しかし、この物語はまさるとおじいちゃんの間を描いているものである。そこでまさるにとってのおじいちゃん存在が大きく変わるところととらえ直した。すると、子どもたちはまさるがおじいちゃんの死を確かに認識したところをあげた。そこで、その前と後では、まさるの気持ちがどのように変わったのかをもう一度考えた。また、まさるの変化が、文章の描写の上でどのように書き表されているかを読んでいった。「麦わら帽子」や「ひまわり畑」といった象徴的に描かれている物の表現の違いに気付いた子どもたちは、いっそうまさるの内面の変化に近づくことができた。

作品の主題に近づくために

4年生の段階では、作品の主題を考えることは難しいことであるが、作品の言いたいことを4年生なりに表現することは高学年での主題をつかむ学習のステップになると考える。そこで、まさるの変化を、子どもなりに表現させたいと考え、「このあとのまさる」を想像して表現させた。

